



処刑少女の
生きたる道



ちやうど
彼女にして
年上でも
しれぬぞうだ？

ショートストーリー

GA文庫ヒロインフェアSS集



そうだ、売国しよう

天才王子の
赤字国家
再生術

お隣の天使様にいつの間にか
駄目人間にされていた件

Tomodachi no imouto ga
ore ni dake uzai

友達の妹が
俺にだけ
ウザい

GA文庫

バレンタイン

ちよっぴり
彼女にしてくれませんか？
年上でも
彼女にしてくれませんか？

「……桃田くん」

「どうしました、織原さん？」

「来たよ、とうとう来たよ……すごい奇跡が起ったよ」

「な、なにがですか？」

「メロンブックスから『フェアをやるので冬をテーマにしたSSをお願いします』というオファーが来て、どうにか仕上げた直後に『GA文庫でもバレンタインフェアやるんでSSお願いします』という、まさかのかぶせオファーが」

「け、結構ぶっちゃけますね」

「ぶっちゃけたくなるよ……。だってもう、モロかぶりじゃん。『冬をテーマにしたSS』と『バレンタインをテーマにしたSS』って、ほぼ内容かぶってるようなもんじゃない？」

「ま、まあバレンタインも冬のイベントの一つですからね」

「せめて同時にオファーしろって思うよね。今回、メロンブックスの方は偶然、バレンタインネタじゃなかったからどうにかなったけどさ。これでそっちの方のSSを『冬だからバレンタインネタにしよう』って考えてたら……詰んでたからね。バレンタインSSを書いた後に、も

う一度バレンタインのSSを書くという地獄が待ってたからね」

「危なかったですね……」

「そもそも……バレンタインみたいなイベントをSSで書かせること自体、どうかと思うよ。こんなのSSでやっちゃったら、本編のバレンタインの回が来たとき私達はどうすればいいの？」

「……まあ、シレッと何食わぬ顔でもう一度バレンタインをやるしかないでしょうね」

「まあ百歩譲ってメロンブックスの方は、別にいいよ。向こうは書店で本を売るのが仕事だし……なにより、いろいろと手を尽くして本を売ろうという誠意と熱意に溢れてるからね」

「……なんかメロンブックスには優しいですね、織原さん」

「当たり前でしょう。私達の本をどれだけ売ってもらってると思ってるの？ メロンブックスの売り上げ……ぶっちゃけ半端ないからね。毎回タペストリーまで依頼してもらっちゃって、もうどれだけ感謝してもし尽くせないよ」

「な、なるほど」

「専門店さんが本を売るために頑張ってくれることは、とてもありがたいことだからね。私だって協力を惜しまないよ。でも……GA文庫は別でしょ？ 本を作ってる側であるはずのレーベルが——作家のことを誰よりも理解して支えていかなければならない編集部が、なんで『バレンタインをテーマにしたSS』なんて無理難題を作家に課してくるの……？ 『冬をテ

マで』ってオーダーしてきたメロンブックスより、なんで自由度低くて難易度高いことをオーダーしてくるの……?」

「いやそれは……G A文庫だって、本を売ろうと頑張ってくれてるわけで」

「それはわかるんだけどさあ。なんていうかさ……配慮がなあ。配慮が足りないような気がするんだよなあ。バレンタインってさ、やりようによつてはそれで一冊書けちゃうようなネタじゃない? それをSSでやらせちゃうって……」

「お、織原さん」

「まあでも——もしかすると、これはG A文庫の優しさなのかもしれないね」

「え……」

「ぶっちゃけ……ラノベって今の時代、厳しいからね」

「ああ……」

「多くの作品が……売り上げとかの問題から短い巻数で打ち切られてしまう……五巻超えるシリーズなんて、全体から見たら一割にも満たないんじゃないかな」

「かもしれないですね」

「現代ラブコメの場合、大体の作品が春スタートなことが多いからさ。となると……多くの作品が冬を越せない……。現代ラブコメの多くが、越冬できないで終わってしまうの」

「え、越冬って……」

「しかもバレンタインなんて、冬の終わりの方だからね。クリスマスやお正月という冬イベントを消化して、さらにその先にあるイベントだから。そこまで辿り着ける作品なんて……本当に、ごく一部の限られたエリートラブコメ作品だけなんだよ」

「……辛い時代ですね」

「だからね……思うんだ。二月にラブコメフェアやるから、バレンタインをテーマにしたS S……一見安易で短慮としか思えないこの戦略も、もしかしたらG A文庫の優しさであり、粋な計らいなんじゃないかって」

「粋な計らい……」

「多くの作品が不本意な打ち切りで終わったしまう。やりたかったはずのたぐさんの季節イベントも、未消化なまま作品が畳まれてしま……そんな事実には、G A文庫だってきつと心を痛めていたはずなんだよ。だからこそ……だからこそせめて、フェアのSSでぐらい、本編ではできないかもしれない『バレンタイン』のネタをやらせてあげよう。もしかしたら越冬できないかもしれない作品に、せめてSSでぐらい二月のイベントをやる機会をあげよう……そういう優しい意図があつたのかもしれない!」

「そ、そんな意図が……!」

「そうだよ、そうに違いない。まさか天下のG A文庫が、なんの意味も考えもなく、あつさい戦略で『バレンタイン』のSS書いて『なんて言ってくるはずもない!』」

「さすがGA文庫ですね」

「うん、一生ついていこうと思うよ。まあ……だからね、フェアのSSをやらされることに文句ばっか言ってもしょうがないよね。できないかもしれないバレンタインイベントをやらせていただけることを……ありがたいことだと思わなきゃ」

「そうですね」

「真面目に一本SSを仕上げることを面倒くさがって、『とりあえず編集部批判しとけばいいや』みたいな作風に逃げちゃダメなんだよ!」

「……本当にそうですね」

「というわけだから、桃田くん——始めるよ。私達のバレンタインSSを。いつか本編でやるかもしれないけれど……それはそれとして、今回だけのバレンタインイベントを」

「はい!……と言いたいところなんですけど、織原さん」

「どうしたの?」

「大変言いにくいんですが……そろそろ文字数の限界です」

「ええっ!? 嘘でしょ? だって、今回は書店特典のペーパーと違って、QRコードで読んでもらうタイプのSSじゃ……」

「それにしたって限度つてもんがあるらしいです。他作品との兼ね合いともありますし」

「え、えー……。え、えつとじゃあ、やっぱり私達のバレンタインは、いずれ本編で! 越冬

できたらやります!」

「……ゲダゲダですね」

修道院バレンタイン

処刑少女の
生きる道

冬のある日、修道院に戦慄が走った。

幼児虐待施設と名高いこの修道院で、子供たちにチョコレートが配られたのだ。

この世界には、異世界から人が訪れる。日本という国から訪れる人々が打ち立てた古代文明期があつた名残で、冬の特定の日に親しい人にチョコレートをプレゼントするイベントが存在していた。

そのイベントの日なのだが、チョコレートをもらつて素直に喜んでいる子供は少数だった。

この修道院は世界を害する禁忌を狩り取る処刑人を育てる施設だ。ほのほのイベントなどありえない。しかもチョコを配つたのが導師『陽炎』だったため、ほとんどの子供は受け取る際、あまりの意味不明さに恐怖で震えていた。

「これは……」

「……間違いありません」

幼いモモとメノウの手にも、チョコレートを握られていた。導師直々に渡されたチョコだ。

二人は神妙な顔つきで視線を合わせて頷き合う。

「毒ね」

「毒ですね」

疑う余地はなかった。甘くておいしくて子供のみんなが大好きなチョコレート。そんな贅沢なもの、あの導師が子供にただで配るはずがない。

訓練の一環として、毒を仕込まれていると見て間違いなかった。食べ物をもらつて疑うことなく口に入れる奴など死ねということだろう。さすがに致死毒ということはなからうが、数日熱を出してぶつ倒れるくらいの毒物が注入されているに違いなかった。

「でも、これはどう処理しましょうかー?」

「適当に捨てたら、それはそれで問題なのね」

これが訓練の一環だとすると、プレゼントをした相手にすら気がつかれないように処理することが求められている可能性があつた。つまりは、毒を仕込んだ相手に悟られないように毒物进行处理してみせよという課題だ。裏の裏まで読んだメノウは、名案を思い付いた。

「いいことを考えたわ」

ちよつとした意趣返しも含めた発案をモモと共有し、メノウたちはとある作業を始めた。

数時間後、メノウは導師に手作りチョコレートを差し出していた。

「どうぞ、導師。チョコです」

「……」

チョコレートを差し出すメノウを見る導師は、なぜかいつにも増して冷え冷えしていた。

「メノウ」

「はい」

「お前、どこでこれの材料を手に入れた」

びしりとメノウの表情が凍り付いた。

いま差し出しているものは、導師からもらったチョコレートを溶かして固めて造ったのだ。ちなみに幼い二人は『湯煎』という工程を知らなかったので、できあがったチョコレートはチョコレートというよりは固まって焦げ付いたヘドロといったほうがいい見た目をしていた。

導師からもらったチョコレートを使ったことがバレた。これはまずいとメノウは直感する。なにせ導師からもらったチョコレートは、十中八九毒入りである。つまりいまメノウが差し出しているチョコレートも毒入りだ。そんなものを食べさせようとしていたことが判明したからには、ひどい目に遭う。

せめてここはモモが関与したことだけは隠し通そうと、メノウは悲壮な決意を固める。

「ひとつ、言っておくが」

「は、はい」

「私がチョコレートを配ったのは、処刑人として常識を知る必要もあるだろうと考えたからだ。当たり前のイベントを体験していなくては、何気ない会話でボロが出ることもあるかもしれない

い、とな」

メノウからチョコを受け取った導師は、その場で口に入れた。ほりほり、と錆びた鉄板を鋸で削っている時とそっくりな音が鳴った。

「当然だが、今日配ったチョコには毒も薬物も入っていない」

メノウが差し出したチョコを残らず食した導師は、苦々しく顔をしかめた。

「だが、このクソまずい物体のおかげで、ひとつ気がついた。人並みのイベントを体験させるより、人並みに調理ができる訓練をさせる必要があったな」

舌打ちした導師は不機嫌そのものの面で、「なんかやらかした」という顔をしているメノウを置いて自室に戻った。

次の年から、同じイベントが行われることは、決してなかった。

話は最後まで聞くもの

「どうしたんですかその手」

ソファに座っていた周の右手首になされたテーピングを見て、真昼は眉を寄せた。

「ああ、体育でちよつと捻った。保険医に見てもらったら数日安静にしろって」

体育でバスケットボールをやっていた際にうっかり体勢を崩して手をついたはいいものの捻って軽い捻挫をした、という何ともしまりのつかない事故の結果だ。

痛みも少しなものであるし、数日すれば問題なく動かせるようになるらしいので、周としては然程気にしていないのだが……真昼は、眉を寄せたままである。

「……どうするおつもりで？」

「どうもこうも、普通にするけど。無理に動かさなければいいし。足と違って手だし、動かさなくてもなんとかなる」

「それは前に足を捻った私への当てつけですか」

「曲解しないでくれよ。とにかく、多少日常生活に影響は出て大した支障はないから問題ないよ。気にすんな」

別に氣遣ってくれ、とかは思わない。勝手に捻って痛めただけであるし、そもそも周は左手

が使えるので困るほどのでもないのだ。

ただ、真昼はそう思わなかったらしく、周の右手首を見た後そつとため息をついた。

「……治るまではある程度私がサポートします」

「え、いや別にいいよ。左手使えるし、生活にも困らないよ」

「両手があっても家事がロクに出来ないのに片手で出来るとでも？」

「ぐつ、それを言われると……いや、ほんとに気にしないでいいから。左手があるし」

「いいから素直に恩を返させてください」

恐らく、彼女は足を捻った時の事を気にしているのだろう。ご飯を作ってもらったので恩は帳消しになっていると思うのだが、真昼的にはそうもいかないのだろう。

淡々とした声で言い切られれば断る訳にもいかず、周は困ったなあと眉を下げながらも言葉に甘える事にした。

手首を捻った事が発覚したその日から、真昼は甲斐甲斐しく世話を焼いてくれた。

食事は片手でも食べやすいようにご飯を握ったり、本来周がするべき家事もある程度代わってもらったり、買い出しも任せたりと至れりつくせりで、周が困惑するほどだ。

ただ、非常に気が進まなかったのは、食事の際のおかずの食べ方である。

「いや俺左手で食べられるから」

お隣の天使様にいつの間にか
駄目人間にされていた件

餌^{えさ}を運ぶ親鳥の如く、真顔で周の口におかずを運ぶ真昼に、周が逆に恥ずかしい思いをしていた。

真昼としては今回怪我人を看病するという視点しかないので恥ずかしさもないのだろうが、される側としてはたまったものではない。嫌という訳ではなく、非常に羞恥^{しやうち}が滲^{にじ}む。

普段右手を使っているから左手は動かしにくいと思われているのだろう。だからといって、あーんをされるのは勘弁願いたい。

これで真昼が恥ずかしそうにしていたら周も羞恥で死ねたのだが、あくまで義務的にされているので中途半端に羞恥で死にそうである。

黙々と周の口におかずを運ぶ真昼に、周は盛大にため息をついた。

「……あのさあ、今日状していい?」

本当は最初に言うつもりだったのだが、勢いに押されてされるがままになってしまった。言っていれば、こんな恥ずかしい事はされなかっただろう。

「何ですか」

「……俺、両利き」

「え?」

「基本的に右手を使うけど、両方使えるように仕込まれてるから、別にご飯くらい普通に食べられるというか……」

周は、左手が使えると主張したつもりだった。真昼にはまさか両利きだとは思われなかったらしく、そのまま押されてずるずると食べさせられていた。

周の告白に、真昼は固まった後徐々に頬を赤らめ始める。

「な、何で言わなかったんですか」

「言おうとしたら何故かやる気に満ちた真昼に押されたんだよ。俺は止めただろ」

「そつ、それはそうですね」

「まあ今回やる気満々みたいなのでこれが外れるまで食べさせてもらおうかな」

散々恥ずかしい思いをしたのだから、真昼も恥ずかしい思いをするべきだろう。これくらいの仕返しは許^{はす}される筈だ。

そう思いながら内で暴れまわる羞恥心を抑えながら笑ってみせると、真昼は周の羞恥を引き継いだかのように顔を赤らめて、やけになったように周の口におかずを詰め込み始めた。量とペースが多いのは、確実に八つ当たりが入っている。

「おい早すぎる」

「知りません」

いつもよりも尖った声で突っぱねられてそっぽまで向かれた周は、真昼の態度に小さく笑って、自分の内側に居る羞恥を隠しながらいつも通りにおいしいおかずを黙って咀嚼した。

とても大事なバレンタイン

ピーン、ポーン。

「とある何の変哲もないごく普通の土曜日の午後一時。間の抜けたチャイムの音。『黒き仔山羊の鳴く夜に』の大事な作業に動しんでいた俺はキーボードを打つ手を止めて顔を上げた。通販を頼んだ覚えはない。それとも俺の心のウザい奴が今日もまた襲撃してきやがったのか。顔をしかめつつ立ち上がった俺は次の瞬間に否応なく確信させられた。

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポポポポポポポツツ!!

「やつぱりお前か彩羽ア!!」

「ちよつとセンパイ大声出さないでくださいよう。近所迷惑ですよ?」

連打されまくる鬱陶しいチャイムの音にキレながらドアを開けると、そこにあったのは予想通りのウザい顔……友達ともだちの妹、小日向彩羽である。

「近所迷惑はお前だ」

「えー、いいじゃないですか。お隣ーつまり5階の住人は私らの身内だけですしい」

「その理屈が通じるなら俺が文句言われる筋合いもなくなかないか?」

「私に怒るのは私、イコール、ご近所の彩羽ちゃんに迷惑になるからNGなんです☆」

「いやいやその理屈が通じるなら俺、イコール、ご近所の明照あきてるくんに迷惑にだな」

「いやいやいやいやセンパイはー」

「ちよ、ちよつと二人とも。か、勝手に二人の世界に入らないでつ……」

きわめて不毛な議論を続ける俺と彩羽の間に、か細い声で割り込む人物がいた。

透明感のある髪、軽く化粧した顔、薄く塗ったリップの艶、耳で揺れる貝殻のイヤリング。

「真白ましろか。……何か随分気合い入ってるな。出かけるのか?」

「べつに。出かないけど」

「マジか。そのわりに化粧とか、オシャレとか……」

「いちいち突つ込まないで。これくらい最低限の身だしなみ。アキは女の子を知らなすぎ」

「お、おう。そういうもののなか」

マンションの廊下を三歩進めば到着する距離のために時間をかけておめかしするとは、女の子ってやつは非効率的な生き物なんだなあ。

「てか二人してどうしたんだ? 二人一緒に訪ねてくるのはさりげなくレアだよな」

「……! そ、それは……」

「もーセンパイってば気づかないフリしちゃって。今日が何の日か知ってますよね? 期待してそわそわしてたんじゃないですか? 女の子を知らない童貞のセンパイには、妄想の中だけ楽しんだことのないイベントかもしれないですけど」

顔を真っ赤にしてうつむく真白と、にゅふと口を「w」みたいな形にする彩羽。

「イベント……？ 今日は何の変哲もないごく普通の土曜日だろ？」
 「またまた強がっちゃって。本当は期待してたんですよ？ こうして私と真白先輩が訪ねてきて、内心ガッツポーズを決めてるんですよー！」

「意味わからん。仕事の邪魔をするようならガッツポーズの形にした手を振り上げてそのまま脳天に叩きつけるがー……」

「バイオレンス!? えっ、マジですか？ 冗談ですよ、ね、センパイ？」

「今日が何の日か……本当に、知らない……？」

「知らん」

「ええええええええ信じられないんですけどおおおおおおお!!」

何だ。何なんだ一体。俺はどんな非常識を晒してしまっているんだ!?

「真白先輩。こうなったら先手必勝。疾風迅雷ですよ!」「う、うん。この鈍感魔神には、ブツを突きつけるしか……!」「せーの!」

二人は俺に背を向けコソコソと何か相談し合った後、再びくるとこちらを向く。

そして意を決したような表情で、後ろ手に隠していた洒落た包装の箱を、二人して差し出してくる。

「これっ、チョコです。食べてください!!」

「おお、サンキュ」

「あっさりすぎませんか!? こんな美少女からチョコをもらってその反応とか!」

「き、鬼畜男……真白の一世一代の勇気を、こんな簡単に……」

「い、良いリアクションがでなくてすまん。でも『黒山羊』の作業が佳境に入ってる俺に、差し入れを持ってきてくれたんだろ?」

「は?」差し入れ……?」

「違うのか? — あ! やべ、もうこんな時間。さっさと作業に戻らないと」

「むむ。っていうかこんな大事な日にセンパイは何の仕事をしてるんですか? そのお仕事が女の子からのアプローチよりも大事だっていうんですか」

「そりゃそうだろう。っていうか今日が大事な日だってお前もわかってるんだろ。そう、今日は一年の中で一番目か三番目くらいに大事な日だ」

「アキはいま……何の作業してるの?」

訝しげに訊ねる真白に、俺は何を今更とあきれながらこう答えた。

「え? バレンタインイベントの更新作業だけ」

その後、俺は女子二人に「鈍感クソ野郎」「女の敵」「仕事の鬼」と散々に罵られた。けど何故かチョコは取り上げられることはなかった。包装を解いたら顔を覗かせたそれが丹精込めて手作りされたものだとかわかった俺は、密かに来月何かお返ししなきゃなあと考えたのだった。

味比べ

天才王子の
赤字国家
再生術
売国しよう
そうだ、
そうだ、

王族とは、この世で最も家庭的という言葉から縁遠い存在である。

彼らは民を従える人間だ。その時間の多くは、国家の象徴としての活動や、国政の運営にあてられており、身の回りの世話などは他人任せが通例である。

それを傲慢や怠惰（ごうまん）というのは些（ち）か狭量（きょうりやう）であろう。象徴の活動や国政の重要性を思えば、雑事（ざつじ）は他人に任せて仕事に集中すべきというのは当然だ。また、身の回りのことを自分でやるのは、雇用を減らすという側面もある。王族は民を養う立場でもあるのだから、雇用は減らすのではなく増やすのが役目だ。

つまり何が言いたいかといえば——大半の王族は、料理が出来ない。

「ニニム、料理を教えてちょうだい……！」

「は？」

その日、ナトラ王国に仕える補佐官ニニムは、調理場に連れてこられた上で、ナトラ王国王女フラニーヤ・エルク・アルバレストにそう求められた。

「ええと……お教えるのは構いませんが、急にどうされたのです？」

王太子ウエインの身の回りの世話も任されているニニムは、当然のように調理技術も持って

いる。教えることに問題はないが、それにしても突然だ。

「ニニムはバレンタインって聞いたことはある？」

「バレンタイン、ですか？ いえ、存じませんが……」

人名が何かならうかと首を傾げると、フラニーヤは言った。

「私も先日知ったのだけれど、ソルジエスト王国で行われている催しらしいわ。なんでも、元は殉教した聖人を尊ぶ催しだったのが、最近（さいきん）はソルジエスト王の食道楽（くうどうらく）にあてられて、新しい異性に日頃の感謝を込めてお菓子とかを贈る日として定着しつつあるとか」

「はあ、なるほど」

ここまでの説明で、ニニムは大方のことを理解した。

「つまり、トルチェイラ王女がその催しにかこつけてウエイン王子にお菓子を振る舞う予定であり、フラニーヤ王女はそれに対抗するおつもりということですね」

「まさしくそれよ！」

トルチェイラとは、現在ナトラ王国に留学中のソルジエスト王国王女である。

国籍こそ違えど、トルチェイラとフラニーヤは共に王女で、また年齢も近い。ならばさぞ気が合うだろうと思われるところだが——安易にそうならないのが人間関係の妙だ。

兄を敬愛し、補佐官ニニムを姉のように慕うフラニーヤにとって、憚（はば）ることなくウエインに接近するトルチェイラは、さながら家猫フラニーヤの縄張り（とぎま）を侵略する外様猫なのだ。

「これ以上トルチェイラ王女に好き勝手させないためにも、私がトルチェイラ王女よりも美味^{おい}しいお菓子を造って、お兄様に食べさせるしかないのよ……！」

メラメラと対抗心を燃やすフラニーヤ。

トルチェイラ王女を妨害する手段など他にも幾らでもあるところだが、あえて真正面から挑もうとする辺り、育ちの良さが表れているな、とニニムは思った。

その時だ。

「——ほう、興味深い話をしておるではないか」

あつ、という顔になるフラニーヤ。そこに現れたのは、まさに今話題にしていたトルチェイラだった。

「ど、どうしてここに」

「どうしても何も、妾が調理場に通うのはいつものことよ。よもや妾に料理の腕前で勝とうなどという話を聞くとは予想せんかったがのう」

「ふ、ふん、言っておくけれど、私にかかればトルチェイラ王女のお菓子なんて一撃よ……！」
猫のように毛を逆立てるフラニーヤに、トルチェイラは笑って言った。

「ふふ、ろくに調理場に立ったこともないであろうに、よう吼える。しかし面白い。ならば次のバレンタイン、どちらがウエイン王子の舌を満足させるか、勝負しようではないか！」

「望むところよ……！」

バチバチと火花を散らすフラニーヤとトルチェイラ。

傍に立つニニムは、そんな二人の様子を見て、小さく呟いた。

「……まあ、これはこれで仲が良いということなのでしょうね」

なお、最終的な勝敗であるが、

「ん？ この前のお菓子？ ああ、ニニムのが一番美味^{うまい}かったぞ」

ウエインの好みを完全に把握しているニニムによって、王女二人はあえなく粉砕されるといふ結末であった。

「さ、さすがだわニニム……」

「思わぬ伏兵がおったわ……」

呻く二人の王女に、精進されることです、とニニムは微笑んだ。